

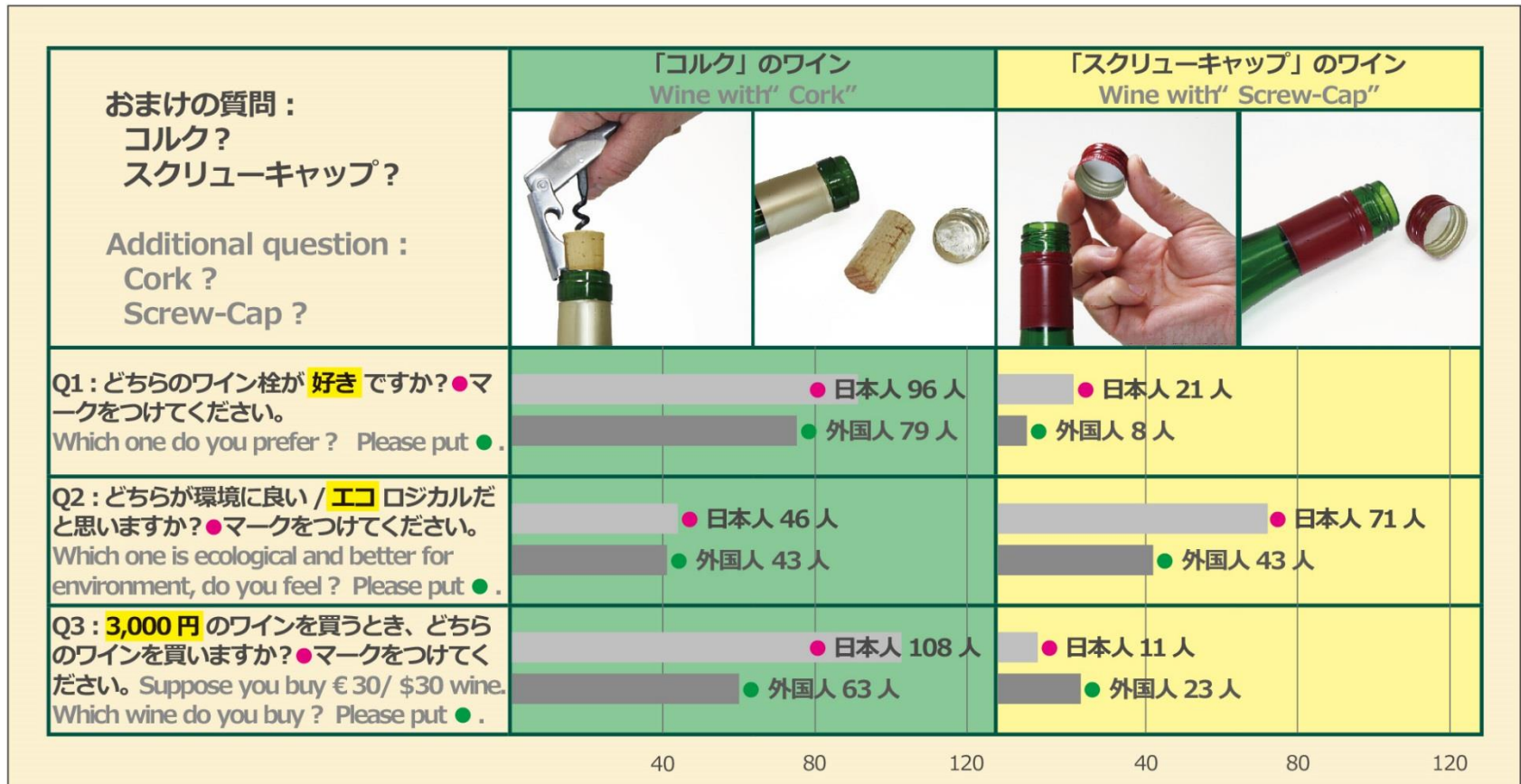
アモリム社訪問記録とコルク知識 A visit to AMORIM, the largest cork company in the world + cork tidbits 1/9

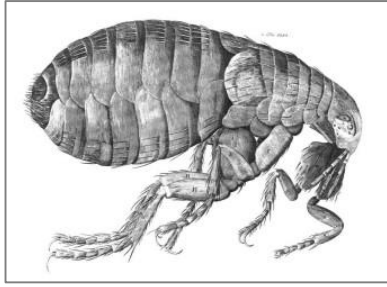
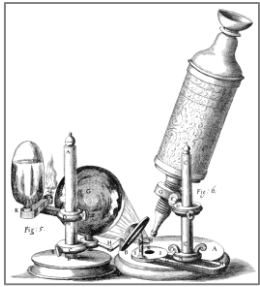
- アモリムは世界のワイン栓の3割、シャンパン栓の5割を供給する世界最大のコルクメーカー。初めて訪問しました。(2014年11月)
- アモリム本社・本社工場はポルトガルのポルトから車で30分ほど。応接室には「KAIZEN-カイゼン」のトロフィーが。日本式の品質改善手法を採用。
- 工場規模、工場の清潔さ、品質管理の水準など、すべてが予想を超えていました。TCA除去装置、コルク打ち抜きロボット、エアーク（内部の鬆一す）の全量自動検査装置など、技術レベルもとても高い。ノウハウにかかわるので詳しく書けませんが、スナップ写真をご紹介します。
- かつてのアモリム家がゲストハウスになっていて、ジョアキム・アモリム氏（その昔、当社向け輸出-後述-を担当したそう）から歓待を受けました。



Cork tidbit 3 コルクか？スクリーキャップか？ FOODEX2015での当社の調査
Cork? or Screw Cap?, a survey at Kita Sangyo booth at FOODEX 2015 in Tokyo

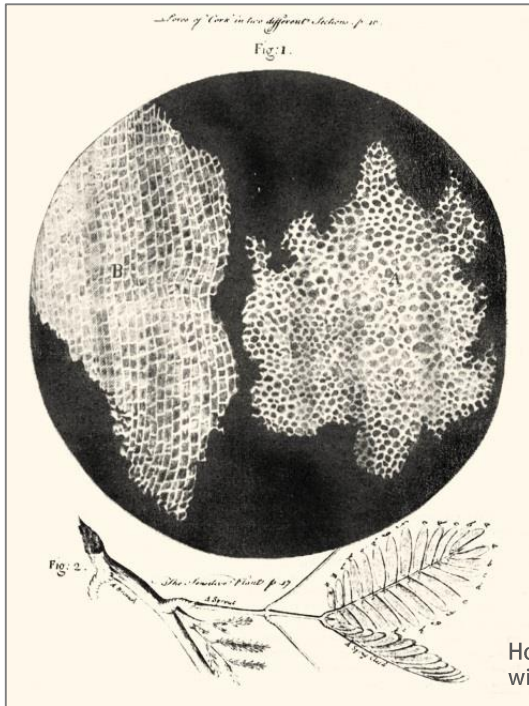
- 2015年のFOODEX展示会場で、日本人119人、外国人87人に、アンケートを実施した結果。（展示会場の来場者は、食品・酒類の関係者・専門家が多い。）
- 思ったより、コルク派が多い。アメリカ人、フランス人は、コルク派。中国人などアジアの人もコルク派が多かった。日本人もコルク好きが多い（のに、実際にはスクリーキャップワインが増加）。
- オーストラリア人とニュージーランド人は明確なスクリーキャップ派だった。





Cork tidbit 4 コルクと細胞 : Cork and "Cell"

- 1665年、英国の科学者フック(Robert Hooke)が様々な顕微鏡観察をまとめて「微細物誌(Micrographia)」を出版。上のイラスト2点は、書中に出てくる、フックの顕微鏡とノミの図。
- その中でコルクの断面(下のイラスト)が紹介されている。フックはコルクの、断面に網目状の組織を見つけ、それを「セル(Cell=細胞)」と名付けた。正確には、フックが見たのは細胞の抜け殻、細胞壁だったが、フックは生物が細胞から出来ていることを初めて見いだした科学者とされる。



Hooke's pictures : wikipedia

**Cork tidbit 5 コルクは「ポアソン比」ほぼゼロの唯一の物質
Cork, the only material nearly "0" Poisson's ratio**

- 古い資料(たぶん1970年代)でその出所がわからないのですが、わかりやすい解説なのでここに採録。「軽量、不浸透性、伸縮性、対摩擦抵抗性、密着性」とあわせて「ポアソン比ゼロの唯一の個体」と記載されている。なお、コルクの細胞はイラストのような14面体なのだそう。
- ポアソン比とは「横方向に圧縮したとき、縦方向に発生する伸びの比率」。Wikipediaによれば「ゴム:0.49 アルミ:0.345 鉄:0.27 ダイヤモンド:0.2 コルク:ほぼ0」。

コルクの物性と構造

軽量—比重は0.12~0.20の間です(図13).

不浸透性—コルクの主成分スパリンと繊維質が不浸透性を保証します(図14).

伸縮性—加圧し後の結果についても、コルクは即座に初期体積の85% 24時間後には94%回復します。(図15)

対摩擦抵抗性—圧縮しても伸縮性を失わない寸法を半減することができず。(図16)

ポアソン比—コルクは横に伸びるに絡められる特性を持つ唯一の個体です(図17).

密着性—数百個の細胞が作り出す伸縮性と吸盤効果のおかげで密着性に優れている。(図18)



Cork tidbit 6 コルクとポルトガル Cork and Portugal

- 全世界のコルクの50%はポルトガル産。(2位はスペインで30%) ポルトガルにとってコルク産業はとても重要な位置づけ。
- その証拠の一つ、2007年にEUの議長国になった記念の2€コインのデザインは、コルク樹。

Cork tidbit 7 「精錡水」、日本最初の液体目薬であり、日本最初のコルク栓を使用した製品
Seikisui, the first eye drop and the first Cork-stopper-used-product in Japan, c 1860

- 岸田吟香(1833-1905)が1867年に販売を始めた「精錡水」は日本最初の液体目薬。それまでは目のふちに塗る練り薬が目洗い薬しかなく、薬液を点眼できるこの目薬は画期的な商品としてよく売れた。主成分は硫酸亜鉛で、亜鉛の「Zinc」に当て字をして「精錡」とした。
- 岸田吟香は、精錡水が人気を博すと銀座に薬舗・薬善堂を開き、精錡水のほか鉄飴煎などの薬を販売。広告にも力をいれた。右下は浮世絵風の引札（広告）。なお岸田吟香は、「麗子像」で知られる画家、岸田劉生(1891-1929)の父。
- 「精錡水」は、日本で始めてコルク栓を使用した国産製品でもあった。「最初は木栓で封緘したがうまく密封できなかった。伊賀上野の奥勝重(1849-1901)がコルクの古い栓を用い、適当な大きさに切って使ったところ、完全に密封できた。」（「日本コルク工業史」1976年東京コルク工業協同組合発行から。右の奥勝重の石碑の写真も同書）
- 「（奥勝重は）当時、余り見かけることのなかったコルクを捜し求め、器用に削って吟香翁の精錡水のコロップとして推奨したところ、あまりの密封効果に翁は欣喜雀躍、（中略）奥氏がコルク業の鼻祖（業祖）と云われる所以」 「当時、コロップの加工業者がどのようにしてコルクを入手したかと申しますと、（輸入品の）ビールやシャンパンの空壺を扱う業者から、壺について回収されたコルクの古栓を買い集めた（後略）」永柳工業・丹羽雄之助、「西日本王冠キャップ工業協同組合・創立40周年記念誌」1992年発行）



コルク業祖・奥勝重の建碑
 (昭和9年12月)

Seikisui ad.
 like Ukiyoe



The first Cork stopper in Japan



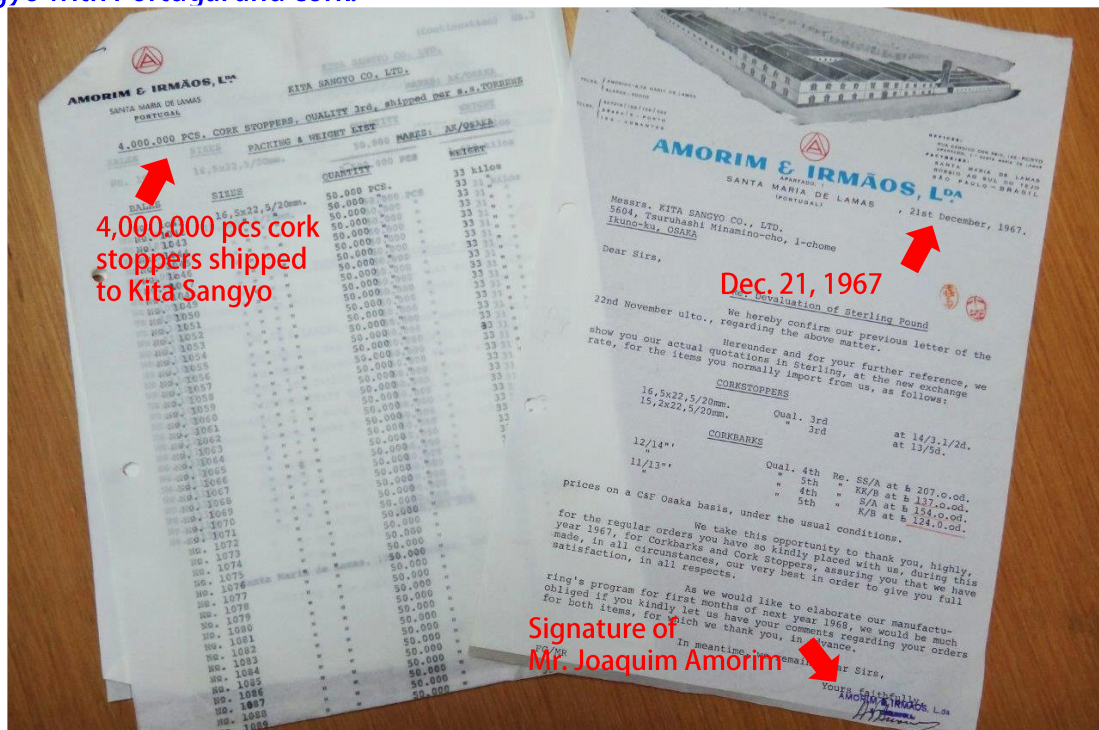
(写真4点は、岡山県の「津山洋学資料館」にて2013年1月撮影)

appendix: a little nostalgic things regarding Kita Sangyo with Portugal and cork.

nostalgia 1 アモリムときた産業

Amorim and Kita Sangyo in c.1960

- 当社は戦前から戦後にかけて、アモリム社から酒びんの替栓に使うコルクを大量に輸入していました。
- 右の書類は、今から半世紀前、1967年のアモリムからきた産業への送り状。貨物は400万個のコルク栓。
- コルクは大阪と東京で荷受していました。東京の古参社員によれば「東京支店のコルクパークの荷受けは吾妻橋のアサヒビールの河岸を借りるか、蔵前の都の河岸を借りて舳からトラックに運び込んだ。戦後何年かは横浜の大黒埠頭でも荷受した」とのこと。
- コルクの輸入は70年代初頭まで続けていましたが、替栓がプラスチック(ポリ栓)に変わって取引がなくなっていました。
- その後30年ほど経過した2005年ごろ、ワインコルク栓で再度取引開始となりました。時代は巡るものです。



4,000,000 pcs cork stoppers shipped to Kita Sangyo

Dec. 21, 1967

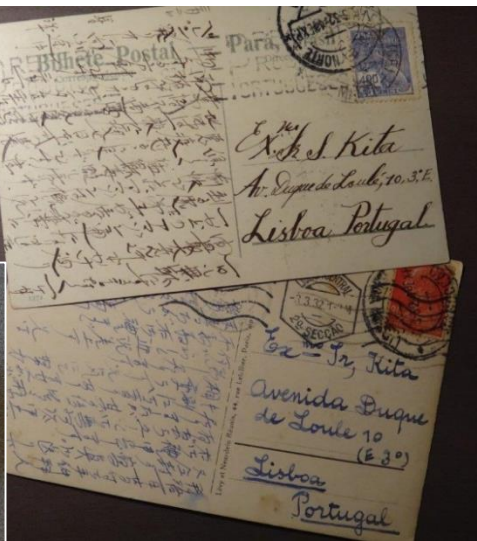
Signature of Mr. Joaquim Amorim

Lisboa branch of Kita Sangyo was in this building until the WW II (picture taken in 2014)



nostalgia 2 きた産業のリスボン支店 Lisboa branch of Kita Sangyo

- 第二次大戦への日本参戦まで、きた産業リスボン支店のあった建物。地下鉄のマーケス・デ・ポンバル駅やパルク駅からすぐの、Avenida Duque de Loulé (デュークデローレ通り)の当時の建物は、入り口がふさがれ廃屋になってはいるが、2014年現在も当時の姿で残る。この建物の3階(日本式では4階)の一室が住居兼事務所で、1929年から1940年までコルクの輸出業務などを行っていた。(写真は2014年撮影)
- 当時の経理資料は何も残っていない。手元には「Avenida Duque de Loulé 10, 3階 喜多」宛の絵はがき(写真の2枚は「ブラジルのベレンから1932年3月1日投函」と「フランスのパリから1932年2月28日投函」)や、当時の支店長が使っていた旅行かばん(世界中を旅したようで各国のホテルのステッカーが貼ってある)が残る程度。



付録：ちょっとノスタルジックな、当社とポルトガルやコルクの歴史

appendix: a little nostalgic things regarding Kita Sangyo with Portugal and cork.

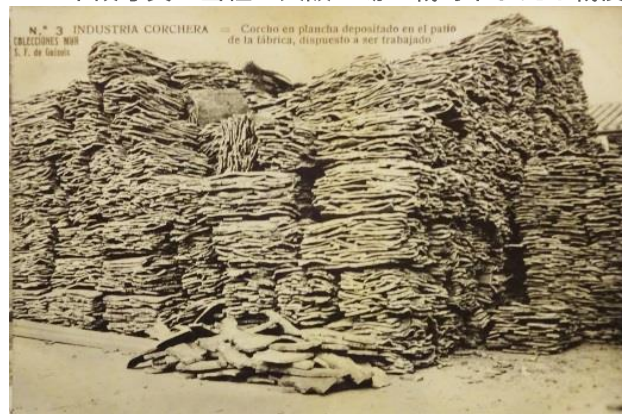
nostalgia 3 創業者とコルク Tetsunosuke Kita with cork, c1919

- 当社創業者の喜多鐵之助は、1916年にコルク商「喜多鐵之助商店」を創業後、1919年にスペイン・ポルトガルを訪問、コルクの直接輸入に道筋を付けました。
- コルク樹林での創業者、コルクバークの前での創業者。場所は不明。



nostalgia 4 コルク工場、スペインと当社 Cork factory in Spain and Kita Sangyo, Japan

- 上段写真：アモリム社ではなくスペインの企業ですが、戦前のコルク加工の様子。
- 下段写真：当社の大阪工場の戦時中または戦後すぐの写真。上の写真に相当するプロセス。



↑↓加工前のコルクバーク（コルク樹皮）

↑↓栓への加工、1個1個、手加工

↑↓栓の選別や後加工



nostalgia 5 コルク販売の台湾出張所 Cork selling office in Taiwan

- 当社はポルトガルだけでなく、戦前の1928年、台湾（台北市大和町二丁目）にも台北出張所を開設し、敗戦の1945年まで、台湾市場での酒類向けコルク栓の販売をおこないました。台湾出張所に関する記録は社内には何も残っていないのですが、台湾のデジタルアーカイブで「喜多鐵之助」（当社の創業者）を検索すると、以下のようなデータがあります。

「七、二崁長口王冠コルク賣買契約(三六〇、〇〇〇個臺中支局、花蓮港支局納) 喜多鐵之助代理人藤井初太郎……」

典藏臺灣

首頁 部落格 Facebook專頁 ENGLISH

珍藏特展 目錄導覽 技術體驗 成果網站資源

目錄導覽首頁 HOTKEY快速導覽 內容主題 典藏機構 進階搜尋 資源聯盟

| 首頁 | 目錄導覽 | 內容主題 | 檔案 | 臺灣總督府檔案 | 專賣局公文類纂
| 首頁 | 目錄導覽 | 典藏機構與計畫 | 國史館臺灣文獻館 | 典藏日據與光復初期史料數位化計畫

七、二崁長口王冠コルク賣買契約(三六〇、〇〇〇個臺中支局、花蓮港支局納) 喜多鐵之助代理人藤井初太郎

推薦分享

8+1 0 いいね! 0 分 享

資源連結

連結到原始資料 (您即將開啟新視窗離開本站)

評分與驗證

請為這筆數位資源評分

★★★★★

送出

<http://catalog.digitalarchives.tw/item/00/0c/ba/97.html>

來源：臺灣省菸酒公賣局 保存狀況：良好 日期：1931-02-10 ~ 1931-03-09

- 「崁」とはセンチメートルのこと。1931年に、4合ビンに使う王冠コルク36万個を、臺灣省菸酒公賣局（日本統治下の酒類専売局）に当社が販売した記録であろうと思われます。

nostalgia 6 和コルク「あべまき」と広島会社 Abemaki, an alternative cork in Japan under the WW II

- 戦争でコルクの輸入が途絶えた日本は大いに困り、コルク(*Quercus suber*)の代替で、日本や朝鮮半島に自生している「あべまき」(*Quercus variabilis*)の樹皮をコルクの代替材として使いました。コルクを「洋コルク」、あべまきを「和コルク」と呼びました。
- あべまきは日本では広島や岡山の中国山地に多く自生（畑のようにコルクだけ植林されているポルトガルと違って、山中に混生）していたので、この地域にいくつかのコルク業者が誕生しました。当社も1939年に広島県佐伯郡廿日市に「日東コルク工業所」を設立、1956年まで炭化コルク（グラスウールや発泡スチロールなどのない時代、断熱材として不可欠だった）を製造していました。この会社の記録も何も残っていません。
- 「アサヒビールは中国山地に広大な土地を所有するが、かつて王冠材料のためあべまきを確保するために購入したものと、聞いたことがあります。また、あべまきは朝鮮半島からも多く輸入されました。

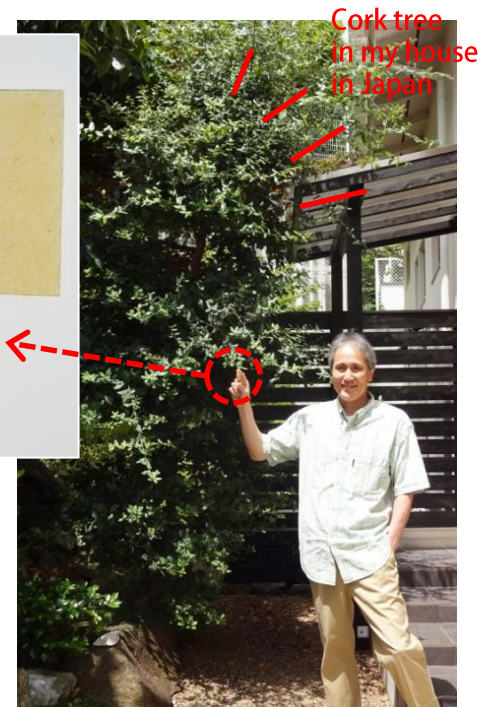


Abemaki bark from Korea

韓国産アベマキの輸入

nostalgia 7 「コルクどんぐり」から生まれたコルクの木 Cork tree born from Cork acorn in Japan

- 創業者・喜多鐵之助は、戦前、ポルトガルから許可を得てコルクの苗木を日本に持ち帰りました。何本かは東大の小石川植物園に寄付したそうですが、植物園に尋ねると今はコルク樹はないとのこと。
- 残りは西宮市の自宅に植えました。うち1本のコルク樹はとても大きく育ち、1960年代に数回、どんぐりの実を付けました。このコルク樹は伐採されて今はありませんが、コルクどんぐりから数本が発芽、そのうちの1本が私の自宅に残っています。日本ではコルクの樹はとても珍しいはず。樹齢50年くらい位のはずですが、何度か植え替えたせいか、気候風土のせい、あるいは実生（みしょう一種から発芽）のせい、あまり大きくなりません。今のところ、どんぐりの実もありません。
- どんぐりの写真は、左が2014年のアモリム社シャンパンコルク工場の事務所横のコルク樹のもの、右が1960年代に創業者（祖父）宅で私が子供のころ拾ったもの。



(end)